



町の子供は町で育てる

「3つの合言葉」元気・学び・会話

滑川町教育委員会だより

「学んでよかった町へ -チーム滑川での教育-」

人は地球を食べている

5月25日（日）、天皇陛下の御臨席を仰ぎ、大会テーマ「人、森、川 つなげ未来へ 彩の国」の下、秩父ミュージックパーク（秩父市、小鹿野町）を会場に開催された第75回全国植樹祭に参加しました。

全国植樹祭は、豊かな国土の基盤である森林・みどりに対する国民的理解を深めるために、公益社団法人国土緑化推進機構と都道府県の共催により開催する国土緑化運動の中心的行事です。

式典で天皇陛下は「秩父や奥秩父の山々に登ったことがあり、原生林を思わせる奥深い森林や渓谷などの美しい自然に魅了されたことを今でも懐かしく思い出します。近年、気候変動の影響がより顕在化してきている中で、森林が持つ役割の重要性はますます高まっています。一人一人が、これからも森林を大切に、木の循環利用を進めながら健全な森林を育み、未来へと引き継いでいくことは、私たちの果たすべき使命であると考えます」と述べられました。

大野元裕埼玉県知事は、あいさつで「多彩な魅力を持つ本県には県土の約3分の1を占める豊かな恵みがある。この大会を契機に、県民全体で森林を守り育てるとともに、森林資源の循環利用を図る活樹の重要性を発信していく」と決意を述べられました。活樹とは、「伐って、使って、植えて、育てる」という森林資源の循環利用を進めることを指します。

式典は、プロローグ、エピローグを含めて2時間あまりでしたが、8時間以上の時間を秩父の地で過ごし、改めて森林と人間との関係を考えることができました。

当日は、とてもきれいな秩父の山々を眺めることができました。秩父盆地は四方を山に囲まれています。前夜の雨の影響か秩父連山には様々な形の雲や霧がかかり、刻々とその表情を変えていきました。その様子にとっても心が癒やされました。亡くなった母のことが思い出されたのも母のルーツが秩父にあることも関係していたのかも知れません。秩父連山は私にとっても母なる山でした。

山地と森林は水源地でもあります。水運、農工業用水、水道用水、観光、発電など私達に大きな恵みをもたらす荒川は、秩父の森林に源流があります。大会テーマのとおり、森林を守ることは、川を守り人を守ることになるのです。

さらに、川は海へとつながっています。宮城県の牡蠣養殖業者が森を育てているという話を思い出しました。宮城県気仙沼湾の牡蠣養殖業者の植林運動です。気仙沼湾では、牡蠣、ホタテ貝、ワカメ、昆布などが養殖されていますが、育てるためにエサや肥料を与えることは一切ないそうです。種苗をつり下げておけば、ひとりで育ててくれます。このことを養殖業者は、すべて外海の潮の恵みだと思っていました。ところが、恵みは森林がもたらしていたのです。森林の腐葉土に染み込んだ雨水は、腐葉土の養分をたっぷりと含み、さらに土中の岩石のミネラル分ももらいながら、河川に流れ込みます。その河川水の養分が海に注ぎ、海藻や魚介類を育てていたのです。

私達の食物は、通常生き物です。お米は稲の実ですね。ということは私達は田んぼを食べていることとなります。魚は、海や川からいろいろなものをとって育ちます。ということは私達は海や川を食べているのではないのでしょうか。私達の体は、田んぼにも海にもつながっている。この認識こそが森林・みどりに対する本当の理解ということになると言えるでしょう。

よろしくお願いします！ □□

4月1日より図書館に配属になりました。

滑川町図書館は、おはなし会やPOPイベント、職業体験など、さまざまなイベントを通して利用者の方とのコミュニケーションを大切にしているという印象があり、この図書館で働けることを楽しみにしていました。今は、図書館の窓から見える桜が満開となり、改めて穏やかな時間の流れる滑川町に魅力を感じるとともに、一日でも早く業務になれるよう緊張感をもって過ごしています。

図書館は、赤ちゃんから大人の方まで幅広い年代の方々にご利用いただいています。そのため、さまざまなジャンル・形態の資料をそろえ、魅力的なイベントを実施することで、さらに多くの方にご利用いただけるようにできればと思っています。皆さまにご満足いただける図書館サービスをご提供できるよう精一杯務めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いします。



図書館オリジナルキャラクター
「ブックろう」

以上は、本年4月の「図書館だより」の再掲です。
来月の教育委員会だよりから、図書館担当の須賀が絵本の紹介コーナーを担当します。
どうぞお楽しみに！



図書館担当 須賀

新シリーズ
第5回

「滑川町の歴史」 part 5

縄文時代の滑川町 ～埋められた土器・埋甕～



縄文時代の遺跡を調査すると土器が意図的に埋められた状態で出土することがあります。これは、特に縄文時代中期頃から住居の炉（キッチン）の中央に土器を据えつける埋甕炉が定着したことなどがあります。埋甕炉は、調理用の土器を据える「五徳」の役目などをしたものとされ、深鉢形の土器が炉体に使用されることが多くあります。

また、竪穴住居の壁際や出入口の床下などにも土器を埋める埋甕が多く見られます。これは、生後まもなく死んでしまった新生児や死産、流産の胎児が、再び生まれるよう願って埋葬したとする説などがあります。穴を掘って埋めるお墓の中には頭に土器を被せていたと考えられるものもあります。これは、死者の再生を恐れた「まじない」の意味などがあったのではないかと考えられています。

滑川町のおおむらさきゴルフ場内の二ツ沼南遺跡などでも、炉の周りを土器で囲み、炉にも土器を据え付ける土器囲い埋甕炉が見つかっており、埋甕炉を使って調理などが行われていた様子が伺えます。



二ツ沼南遺跡の埋甕炉



柳沢B遺跡の埋設土器